

焼山になった岩倉山（岩倉）

藍本の岩倉には、高くて先のとがった山があります。頂上には大きな岩があり、神さまが降りてこられる「磐座」のある山としてあがめ、岩倉山と呼んでおりました。

ある年のこと、来る日も来る日も雨が降り続きました。岩倉山のすそを流れる武庫川はあふれて、大きな洪水となりました。岩倉山もくずれて、山頂の岩がずり落ちてしまいました。

田畑は荒れ、収穫は大きく減りました。その上どうにか実った作物をイノシシに食べ荒らされてしまいました。たまったものではありません。イノシシを退治しないと、田畑の作物は荒らされるばかりです。

冬になり、狩りの季節となりました。さっそく男たちはイノシシを狩りに山へ登りました。ろくなものしか食べていないすきつ腹の男たちはふらふらでしたが、それでも一頭のイノシシを仕留めることができたのでした。

「なんとかイノシシを仕留めはしたが、腹が減って狩りも続けられん。」

「そうよの。このイノシシで腹ごしらえをしよう。」

山頂に着くとたき火をして、イノシシの肉をあぶってみんなで一口ずつ食べたそのとき――。

いきなり強い風が起きました。すると、たき火の真つ赤な火がころころと転げ落ち、あれよあれよという間に山火事になってしまったのです。

岩倉山の松の木は油が多く、燃えやすいのです。てっぺんから山すそへ向かって燃えました。それで消えるかと思ふとまだ消えずに、今度は山すそからてっぺんへ火が向かいます。なんと二度焼けたのでした。

数年して、こんな山火事がまた起きました。村人たちは大きな被害を被ったのでした。

「おそろしいことじゃ。」

「岩倉山の上で肉なんぞを焼いて食べたのが、いけなかつたのだらうか。」

「神が降りてくるところを磐座というそうな。」

「神さまがおいでになるようなところで、肉を焼いて食べたから、神さまがお怒りになられたのかもしれない。」

「岩倉山と呼ぶからたたりがあるのじゃ。」

「そうにちがいない。焼けた山だから焼山と呼ぼう。」

「そうすればきつとたたりもなくなるに違いない。」
こうしていつしか、岩倉山は「焼山」と呼ばれるようになつたのです。

かつて山頂にあつて磐座いわくらとされていたあの岩は、今でもてっぺんの南斜面に焦げ茶色の大きな岩肌を見せています。

